

秀治氏夫婦のこゝろを云ふ。此の時教祖家内の心を直さんとして人々に命じて誰々は
何う云ふ神の守護であるといふこと、其の人の心を書いて出させた。

けふのひはいかほどわがみはびかりてまゝにしたとてつきひしりぞく

四月四日より御書取

このはなしにのこゝろをばゆうならばにほんもからもてんじくのこと
これからはせかいぢゆうをいちれつにつきひそふじをするでしよちせ
これまでもせへいつばいにことほりをつきひだんくぢゆうてあれども
くちさきでいふたるまではたれにてもたしかしよちをするものはない

四月五日より御書取

いまでもつきひのこゝろだんくとせへいつばいにつくしいれども

せかいにはたれかしりたるものはないどふもこのたびつきひせひない
それゆへにせかいぢゆうをどこまでもことわりておくつきひしりぞく
けふのひはなにのはなしをするならばよふきのはじめことばかりゆふ

村田幸助氏五十日程病氣になり御指圖を仰いだ時。教祖は筆をもつておいでと仰せ
になり此の歌をお書きつけになり幸助氏をお地場に御引き寄せになつた。

よふきでもひとはたれともゆわねどもとはいつぽんゑだはちほん
八本八棟八商賣は醬油屋、酒屋、荒物屋、肴屋、呉服屋、鹽物屋、八百屋、表大工、
裏鍛冶屋。

このきいをはやくつぎたいせきこみでつきひのむねがつかへきるなり
このきいもひとゑだしかとついだならあとなるはみなはやくさだまる
なにもかもつきひゆうことしかときけこゝろにさだめつけたことなら

それよりもみのうちなやみさらになしだん／＼ころいさむばかりや
それしらすみのころはたれにてもせかいなみなることばかりゆふ
このところせかいなみとはおもふなよつきひのころばかりなるぞや

四月十四日御書取

けふまでのつきひのころさんねんはよいなることでないとおもへよ
にんげんはあざないものであるからにつきひすることしりたものなし
つきひにはなにかよろづをだん／＼ことわりてあるこれがしよちか
いまでもなにかつきひのざんねんをたいてへくどきつめてあれども
せかいにはたれかしりたるものはなしつきひのころさんねんをみよ
このたびはことわりたうへまたくどきそのうへなることわりである

いかほどにくどきことわりゆふたとてたれかきゝわけするものはない
それゆへにだん／＼ひがらたつけれどいつかこれやとわかるめはなし
けふのひはもふせへつふがきたるからつきひでかけるみなしよちせよ

四月十七日より御書取

このさきのみちのすがらをゆてきかすいかなことをばゆふやしろまい
にち／＼になにをゆふてもそのまゝにみえてくるのがこれはふしぎや
どのよふなことをゆふやらしれんでなそこでもことわりばかり
ことわりもちよとのことではないほどにいかなことをがみえてくるや
ら

どのよふなことがみえるやしれんでなまこときのどくおもてゐれども

なんどきにみえることやらこれしれんつきひのころつみきりてある
こらほどにつきひのころしんぱいをそばなるものはなにもしらずに
そばなるはしごとばかりをおもてゐるみえたるならばもんくかわるで
どのよふなことでもさきへしらしおくあとでこふかいなきよふにせよ
このよふをはじめたかみのことならばどのよふこともみなみえてある
このたびはどのよふこともつみきりてもふさしぬきはさらにでけん
いまゝではどんなことをばゆうたどてまだしいくりとしたるなれども
けふのひはよこめふるまもゆだんしななんどきどんなことがあるやら

四月二十四日御書取

いまゝでにふでにつけたることわりがさあみえてきたころいさむで

これさいがみえきたならばいぢれつはどんなものでもよふきづくめや
このころどふぞはやくにいぢれつはしよちしてくれつきひたのみや

五月十一日御書取

けふからはめづらしとをいゝかけるなにをゆふともちよとにしろまい
このはなしなにをゆふてもそむくなよかみのおもわくゑらいことやで
これからのあとなるはなしやまゝのかみのざんねんはらすもよふを
このさきはなんぼむつかしやまいでもいきてをどりでみなたすけるで
どのよふなむつかしくなるやまいでもこれなをらんとゆふでないぞや
けふまではひがらくくげんきたらんでなにかちがいもありたなれども
だんゝといかなことをもといておくどんなことでもちがうことなし

五月十二日御書取

これまでのみちのすがらとゆふものはまことなんじゆなみちであれども

このさきのみちはなんでもきがいさむどんなめづらしみちがあるやらとん／＼とびでることをみたとてもころあんどはするでないぞやあとなるはよろづつきひがひきうけていつ／＼までもよふきづくめに

五月十三日御書取

いま／＼ではなによのはなししたるともいつのことなるよふにおもふてやれこわやきくよりはやくもふみえたどんなことでもゆだんでけんでこのさきをにち／＼ころいさめるでどんなことでもゆへばそのま／＼

どのよふにむつかしくよふみえたとてよふきづとめでみなたすけるで

五月二十四日七つ時より御書取

これからはどのよなしごとするやらなころしだいにどんなことでもつきひにはだん／＼ころざんねんをどんなことでもみなはらすでなどのよふなことをゆふのもみなつきひいかなしごとをするやしれんできかなるのことがみえるもみなつきひにんげんころあるとおもふなけふからはどのよなことせきこんでどんなはなしをするやしろまいいまなるのつきひのおもふことなるはくちはにんげんころつきひやしかときけくらはつきひがみなかりてころはつきひみなかしてゐるこればかりうらみあるならどのよふなこともつきひがみなかやすでな

五月二十五日四つ時より御書取

どのよふなことをゆふのもみなつきひにんげんごゝろさらにもせんで
いかほどにむつかしよふにおもたとてつきひゝきうけあんどないぞや
このさきのみちをたのしめいれつはかみのざんねんはらしたるなら
にちく／＼にむねのそふじにかゝりたらどんなものでもかなふものなし
このそふじどふいふことにおもふかなつきひたいないみないりこむで
このはなしどこのことやとおもふかなたかいとこゝろでみなあらわすで
なにもかもつきひゆふことしやんせよなにをゆふてもこれちがわんで
せかいぢういちれつこゝろすましたさどんなことをばつきひするやら
どのよふなことをするにもつきひにはたすけたいとのいちじよばかり

で

このさきをたしかみてゐよいちれつはむねのそふじがひとりできるで
このそふじすきやかしたることならばそのまゝすぐにまむりこしらへ
このみちをつきひのこゝろにちく／＼にせきこんであるたれもしらずに
このみちへはやくついたることならばどんなものでもみないさむでな
このはなしたれがするとはおもふなよつきひのこゝろばかりゆふのや
このよふのしんじつなるをせかいぢうどふしてなりとしらしたいゆへ
けふまではいちにちなりとひをのばしどのよなこともひかへいれども
このたびはもふひがつまりきるからはどふもひかへることはでけん
なんどきにどのよなことをきいたとてこれはつきひのざねんりつぶく

つきひにはどのよなものもわがこなりかわいばかりでみてはいれども
いまゝではせかいぢゆうはいちれつにめへくしやんはしてはるれど
も

なさけないどのよにしやんしたとてもひとをたすけるころないので

人を助けるが第一である。

これからはつきひたのみやいちれつはころしいかりいれかへてくれ
このころどふいふことであるならばせかいたすけるいちじよばかり
を

このさきはせかいぢゆうはいちれつによろづたがいにたすけするなら
つきひにもそのころをばうけとりてどんなたすけもするとおもへよ

このたすけどふいふことにおもふかなほふそせんよにたしかうけやふ
まだゝすけりゆけいちれつどこまでもいつもほうさくをしへたいから
このみちをはやくしこもおもへどもいちれつころわかないので
せかいぢうとこにへだてはないほどにいちれつしやんしてくれるよふ
しんじつにころにさだめみなついてかみのゆふことそむきなれば
それよりもつきひのころしいかりとうけとりしだいたすけせきこむ
このたすけちよこのことやおもふなよこれはにほんのいちのこふき
や

これさいがはやくしいかりみせたならどのよなたかいところなるとも
こればかりにんげんわざでないからにつきひぢうよふそむきでけまい

したるならいかほどたかいところでもまねはでけまいしやんしてみよ
つきひよりやまずしなすにやわらんのはやくしよふこだすとおもへよ
いちれつはみなうたごふてたれにてもせかいなみやとおもてゐるので
このところにんげんごころさらになしつきひのおもふことばかりやで
そのことをたれでもしらぬことやからわからないのがかみのざんねん
このごころどふぞしんじついちれつはごころすまするもよふないかよ
ごころさいはやくわかりたことならばそのまゝすぐにしよこだすのに
いまゞではどのよなうそもきいてゐたもふこれからはうそはきかんで
これからはうそをゆふたらそのものがうそになるのもこれがしよちか
つきひにはうそとついでしよこれきらいこのさきなるはつきひしりぞく

それゆへにいちにちなりとひをのばしたいてへなにもみゆるしてゐた
このたびははやくしよこふだしたいとゆふてゐるのをなんとおもふぞ
しよこふもどふいふことにおもふかなみのうちよりにたしかためしを
このためしまことつきひのざんねんはよいなることでないとおもへよ
みのうちにどこにふそくの無いものにつきひいがめてくろふかけたで

秀治氏の事をいふ。

ねんげんはさんじゆくねんいせんにてしんぱいくろふなやみかけたで
それゆへにつきひゆふことなにごともうたごふてゐるこれむりでない
このたびはこのむねのうちすきやかにはらすもよふやこれがだいゝち
このごころつきひのほふへしいかりとつけんことにはどんなはなしも

いかなるのこゝをしたらもみなつきひこんなことをばたれもしろまい
けふのひはよこめふるまもないほどにはやくしよこふだしてみせるで
これみたらどんなものでもとくしんせなにはなしもみなこのとふり
いまゝでのこのざんねんとゆふものはくちでゆうよなことでないぞや
いまゝではやまゝざねんとふりぬけこのたびこれをはらしたるなら
あとなるはどんなやまいいかなるのこゝであろふがみなたすけるで
このよふのにんげんちとをせかいぢうしらしておいたことであるなら
それからほどなたすけもするからにひとことまでにみなたすけるで
これまでだんくどきこゝをゆふてあれどもしんがわからん
このしんはどふいふことであろふならむねのしやんをこれがだいゝち

なにゝてもむねとくちとがちがうてはかみのこゝろにこれはかなわん
しんじつがかみのこゝろにかなわねばいかほどこゝろつくしたるとも
こればかりいかほどたれがそおだんもとてもかなわんつきひしりぞく
なにもかもかみのゆふことしかときけなにをゆふてもちがうことなし
しんじつにめづらしたすけをしへたさそでどのよなこともゆふのや
このよふをはじめてからにないことをどんなことをもをしへたいから
このよふのほんもとなるのしんじつをしいかりしよちせねばいかんで
このもどをしいかりしりてゐるものはどこのものでもさらにあるまい
このたびはほんしんじつをゆてきかすなにをゆふてもしかとしよちせ
このやしきにんげんはじめどふぐはないざなぎいゝといざなみとなり

つきよみとくにさつちいどくもよみとかしこねへどがいちのどぶぐや
それよりもおふとのべいとゆふのはなこれはりうけのいちのどぶぐや
つぎなるはたいしよくてんとゆふのはなこれはせかいのはさみなるぞ
や

これまではどぶぐいつさいみなよせてどのよなみちもとふりぬけたで
このさきはよせなどぶぐをみわけしてしこむもよふをいそぐばかりや
このものはどこにあるやとおもふなよとしはぢういちに、んゐるぞや

年は十一二人ゐるとは前川菊太郎(伊邪那岐命の魂)と故管長中山新次郎(大戸邊命の魂)とである。

このにんはにんげんはじめかけたるとりうけいつさいしゆごぶどぶぐ

や

けふのひはどのよなこともゆうほどになにをゆふてもしよちしてくれ
いま、でもかみのおもわくま、あれどひがきたらんでひかへゐたるで
だんくともふひがつまりきるからはどんなことでもゆふておくぞや
これまではどこのひとでもおなじことなにをゆうてもみなうたごふて
このたびはほんしんちつであるからにこれをむいたらすぐにかやすで
せかいにはあめをほしいとおもたさてこのもとなるをたれもしろまい

此の年松田利平の願に依り辻、仲田、榊井等八人の人達が神樂を持參して雨乞ひをした。其の時雨は降らなかつたが一反の收穫は二石餘あつた。

このもとをしいかりゆふてかゝるからどんなことでもしよちするなら

このはなしつきひのころばかりやでにんげんごころあるとおもふな
このことをみないちれつはしんじつにおもてたのめばどんなことでも

六月二十八日五つ時より御書取

けふのひはこのよはじめてないはなしなにをゆふてもこれきいてくれ
このよふはかみのせかいといひながらどんなことでもしんはしらんで
このしんをまことしんじつしてみせるこれみたならばみなとくしんせ
どのよふなことをするのもしなつきひなにをゆうのもしなつきひやで
このたびはこのよはじめてないことをどんなことでもみなあらわすで
つきひにはたいないよりもこもりゐてどんなしごとをするやしれんで
どのよふなゆめをみるのもしなつきひまことみるのもしなつきひやで

このよふのみづのもとなることをばなまだこれまではゆふたことなし
このたびはほんしんじつのみづのことどんなはなしをするやしれんで
このもとをたしかにゆふてかゝるからせかいなみなることでゆわれん
けふからはどのよなこともゆいかけるなにをゆふてもしかときくなり
にちくにたかやまにてはだんくごどんなことをばはのみたづねる
これさいがみへきたならばどのよふなこともあぶなきさらにないぞや
けふのひはなにのはなしをするやらなどんなことでもしよちしてくれ
めへくのころみのうちどのよふなことでもしかとみなあらわすで
これみたらどんなものでもしんじつにむねのそふじがひとりでけるで

人間は何時迄も他人に抱いて貰つたり負つて貰つたり手を引いて貰つたりしてゐる

様のことではならん。子供三歳になれば一人で立つて歩む。人間十五歳になれば自分の始末は自分がしなければならぬ。お授けでも其うである。何時迄も他人からお授けをして貰ふ様なことではならない。天より授かつた理に照らして自分の精神は自分で治め自分の病氣(性癖)は自分で直して行く様にならなければならぬ。この自治獨立の精神こそ道の精神である。

このたびはどんなことでもすきやかにあらわれだしてみなしてみせたいないになにがあるやらどのよふなものでもしりたものはあるまいこのはなしつきひのしごとこれをみよころしだいになにをするやらけふのひはなにもしらすにたれにてもせかいなみなることであれどもあすにはどふゆふみちをするやらなしんのころろがあらわれてくるこのころろあらわれでたることならばたれもそむきはさらにでけまい

これみたらどんなものでもしんじつにあたまかたげてみなしやんするさあしやんこのころろさいしいかりとさだめついたりたることであるならこのはなしつきひのころろばかりやでにんげんごころあるとおもふなこのことをみないちれつはしんじつにおもてたのめばどんなことでも

御筆先 十三號

明治十一年(教祖八十一歳の御時)四月廿八日九つ時より
御書取

けふまではなにかしんぱいしたなれどあすにちからはおふかんのみち
いまゝではどんななんじゆなみちすじもみゑてあるからことわりばか
b
このさきはたしかうけやうつきひにはどんなことでもあぶなきはない
だんくゝとどんなはなしをきいたとてせかいたのしめつきひはたらき
これからはつきひでかけるはたらきになにをするともたれもしろまい

にちく／＼にせかいのこころみはらせばいちれつこともいぢらしいこと

いぢらしいは可哀相とか氣の毒とか不憫とかいふこと。

つきひにはだん／＼どんなことでもなたすけるもよふせくばかりやで
これまではことわりばかりゆておいたもふこれからはことわりはない

五月五日御書取

けふまではなにもしらずににんげんのこゝろばかりでしんばいをした
これからはこゝろしいかりいれかへてかみにもたれてよふきづとめを
したるならそのまゝすぐにしいかりとりやくあらわすこれを見てください
これさいがたしかりやくがみえたならあとはいつでもみなかんろだい
このさきはつきひいちごふゆふたことどんなことでもそむきでけまい

つきひよりゆふたることをけすならばすぐにしりぞくしよちしてゐよ
いまゝではうちもせかいもしんじつのこゝろにわかりさらにないので
つきひにはだい／＼これがざんねんなんとこれをばすましたるなら
このこゝろどふしたならばわかるやらなんでもいけんせねばならんで
いけんでもちよとのひとではないほどにおふくのむねがこれがむつか
し
いかほごにむつかしことをいふたとてめへ／＼のこどもいけんするぞ
や

このもよふどふしたならばよかるふぞなんでもかみのざねんあらわす
にちく／＼にかみのむねにはだん／＼とほこりいつばいつもりあれども

このほこりそふじするのはむつかしいつとめなりともかゝりたるなら
こゝろさへしんじつかみがうけとればどんなほこりもそふじするなり
いちれつのむねのうちさいすきやかにそふじしたてたことであるなら
それからはせかいぢゆうはきがいさむよふきづくめにひとりなるぞや
しかときけたかやまにてもたにぞこもみればつきひのこごもばかりや
にんげんもいちれつこどもかわいかるかみのざんねんこれおもてくれ

子をもつて神の心を知れ

これまではどのよなことをみたとてもかみのほふにはじいとみてゐた
このたびはもふひがつんであるからなどんなことでもみなゆふほどに
つきひにはせかいぢゆうをみわたせどもとはじまりをしりたものなし

このもとをぞふぞせかいへをしへたさそこでつきひがあらわれていた
このたびのつきひざねんとゆふものはよいなることでないとおもへよ
つきひにはこのしんじつをせかいぢうへぞふしてなりとおしへたいか
ら

それしらすつきひゆふことみなけしてあとにはにんげんごゝろはびかる
このさきはつきひのざんねんりつぷくをみなはらすでなこれがしよち
か

つきひにもざねんりつぷくはらしたらあとにはめづらしみちをつけるで
このみらはどふゆふことにおもふかなよろづたがいにたすけばかりを
せかいぢうたがいにたすけるならばつきひもこゝろみなひきうける

つきひにもこゝろひきうけするからはどんなことでもはたらきをする
はたらきもどふいふことにおもふかなせんとあくどをわけるばかりや

五月十六日御書取

けふまではどんなあくじをゆふたとてわがみにしりたものはあるまい
このこゝろかみがしんじつゆてきかすみないちれつはしやんしてくれ
せかいちういちれつはみなけふだいやたにんといふはさらにないぞや

世界の莖シヅ、社會の柱といふは此の世界一列兄弟の心である。

このもとをしりたるものはないのでなそれがつきひのざねんばかりや
たかやまにくらしているもたにぞこにくらしているもおなじたましい
人間は先天的に上下の區別はない。皆な後天的になるのである。

それよりもだん／＼つかふどふぐはなみなつきひよりかしものなるぞ
それしらすみなにんげんのこゝろではなんとたかひくあるとおもふて
つきひにはこのしんじつをせかいちうへどふぞしいかりしよちさした
い

これさいがたしかにしよちしたならばむほんのねへはきれてしまうに

人間に上下の區別のないと云ふことが分れば競争心や敵對心や反抗心はなくなる。

つきひよりしんじつおもふたかやまのたゝかいさいがおさまりたなら

たかやまのたゝかいとは上流社會の勢力争をいふ。

このよふをどふしたならばおさまるふよふきづとめにでたることなら

よふきづとめは陽氣勤めにして天理教の信仰をいふ。

このこゝろたれがゆふとはおもふなよつきひのこゝろばかりなるぞや

このつとめたかやまにてはむつかしいかみがしいかりひきうけをする
このたびはどんなことでもしんじつにたしかうけやいはたらきをする
かみがでゝせかいぢゆうをはたらけばどんなつとめもこわみないぞや
しかときけたかやまやとてたにぞこをまゝにしられたことであれども
これからはつきひかわりにでるほどにまゝにしよならすればしてみよ

我が子に高低のあるは親の喜ばない所であると同じく人類(神の子供)に高低のある
は神の喜ばぬ所である。天理教の自由平等主義は即ち此の神意に基くのである。

いまゝでとなにかもんくがちがうでなこれからさきはかみのまゝやで
つきひよりあまくだりたるこゝろはなんのこゝろやらたれもしろまい
だいゝちはりうけつくるをたすけたさこゑいちじよふおしへたいから

こゑでもなどふしてきくとおもふならこゝろをかみがうけとりたなら
いまゝではしんじつかみがゆてあれどうちからしてもうたがふばかり
このたびはなにをゆふてもうたごふなこれうたがへばつきひしりぞく
このことはあくどいほどもゆふておくこれうたがへばまことこふかい
つきひよりいちどふいふておいたこといつになりてもちがうことなし
いまゝではつきひなにごとゆふたとてみなうたごふてゆいけすばかり
つきひにはだいゝちこれがざんねんなんでもこれをしかときめるで
これからはつきひゆふことなにごともそむかんよふにかみにもたれよ
したるならかみのほふにもしんじつにたしかひきうけはたらきをする

誠一つが天の理。天の理なれば即ぐと受け取り即ぐと返やすが一つの理。

つきひにはこらほどくどきつめるからこゝろちがへばすぐにしりぞく
しんじつにこゝろにまことあるならばごんたすけもちごふことなし

九月十九日御書取

このさきはりうけのこゑをちがわんよどふぞしいかりしよちしてくれ
けふからはつきひのおもふことをばなどのよなことみなゆいかける
いまゝでもたいてはなしもといたれどつきひおもわくまだゆふてない
これからはどんなはなしをしたることもこれをかならずうそとおもふな
ごのよふなことをゆふやらしらんでなつきひのこゝろせいであるから
このこゝろどふいふことにおもふかなにほんもからもてんじくまでも
このあいだみちのりよほどあるけれどいちやのまにもはたらきをする

このはなしにんげんなんとおもてゐるつきひかしものみなわがこども
いつまでもつきひじいくりしてゐればいつになりてもおさまるめなし
それゆへにつきひでかけるはたらきはどこへでるやらしりたものなし
せかいちうこゝろすますとゆふからはちよとのことやとさらにおもふ
な

どのよふなことでもめへ〜むねのうちすましたならばあぶなきはな
い

だん〜とつきひにち〜おもわくはおふくの一とをまつばかりやで
このひとをどふいふことでまつならばいちれつわがこたすけたいから
ことしにはどんなめづらしみちすじがみゑてくるやらこれしれんでな

くちさきでなんぼしんじつゆふたとてたれかきゝわけするものはない
尊い眞理である。

それゆへにつきひこのたびどのよふなこともしんじつみなしてみせる
どのよふなことをしたるもにんげんのこゝろまじるとさらにおもふな
つきひにはあまりしんじつみかねるでそこのよなこともするのや
いかほどのごふてきたるもわかきでもこれをたよりにさらにおもふな

金も頼むに足らず名も頼むに足らず力も頼むに足らず若きも頼むに足らず父母兄弟
妻子親戚知己朋友も頼むに足らず誠一つと理が頼り。

このたびはかみがおもてへあらわれてじゆよじざいにはなしするから
どのよふなこともしんじつするからはむねのうちよりひとりすみきる

いまゝではいちれつはみなにんげんのこゝろばかりでしやんしたれど
このたびはどのよなこともにんげんのこゝろしやんはさらにいらんで
なにもかもどのよなこともゆふておくなにをゆうてもうそとおもふな
たかやまでどのよなものがはびかるもこのしんじつをたれもしろまい
つきひにはどんなところにあるものもむねのうちをばしかとみてゐる

神にとつては見抜き見通しの世界である。

むねのうちつきひこゝろにかなふたらいつまでなりとしかとふんばる
つきひよりにちくこゝろせきこめどそばのこゝろにわかりないので
せきこみもなにのことやおもふかなりうけつくればみづがほしかる
このはなしみないちれつこのこゝろにはなんとおもふてしやんしてゐる

つきひにはだい、ちこれをたすけたさそこでどのよなこともゆふのや
なにもかもつきひいかほどいでもまことにきいてくれるものなし
それゆゑにつきひのざねんりつぶくがやま／＼つもりかさなりである
いま、ではつきひきたらんそれゆへにぢいとしてゐたことであれども
このたびはもふひがつんであるからなごんなしごともはやくかゝるで
このさきはどのよなみちがあるとてもひとをうらみなわがみうらみや
このはなしどこのことともゆわんでなたかやまにてもたにぞこまでも
どのよふなことをゆふのもたすけたさそこでいろ／＼くどきつめたで
このさきはなにをゆふてもどのよふなことでもあしきことはゆわんで
しんじつのたすけばかりをせくからにそこでだん／＼いけんしたのや

しんじつにこゝろすましたそのうへはたすけるもよふはやくおしへる
このたすけどふいふことであるならばほうせんよのまむりづごめを
まだたすけやまずしなすによわらんのしよふこまむりをはやくやりた
い

人間をして不老不死の靈體たらしめんとするのが神の最後の希望である。

なにもかもよろづたすけをせくからにこゝろしだいにどんなことでも
いちれつはみなめへ／＼のむねしだいごんなことをかかなわんでなし
あまごいもいま、でかみがしんじつになにもゆふたることはなければど
このたびはどのよなこともしんじつをたづねくるならみなゆてきかす
つきひにはなにかなわんとゆわんでなみなめへ／＼のこゝろしだいや

御筆先 十三號

二〇八

精神—精神—一到何事か成らざらん。此の神歌は人間にとつて眞實眞の興奮劑である。

御筆先 十三號終

御筆先 十四號

明治十二年(教祖八十二歳の御時)六月より御書取

どのよふなゆめをみるのもつきひなりなにをゆふのもみなつきひやで

夢にも靈夢もあれば正夢もあり迷夢もあれば妄想もある。其の中靈夢や正夢には神の意志が映るのである。

つきひよりにち—こ—ろせきこめどそばのこ—ろはいづむばかりで
いづむのもどふしていづむことならばかみにはなにもしらんゆへなり

官憲が壓迫するのは神の深い思召も天理教の價値も知らないからである。其の無智の威喝に恐れて信徒が引つ込んでゐるから此の御言葉があつた。

せかいにはそれをしらすになにごともみなしたがふていづみるなり

御筆先 十四號

二〇九

つきひにはだい、ちこれがざんねんなそでどのよなこともするのや
つきひよりにち、ころせへたとてくちではどふもゆふにゆわれん
それゆへにゆめでなりともをいかけはやくしやんをしてくれるよふ
句ひ掛けとは神の教の下話しをすることをいふ。

つきひにはこのざんねんといふものはくちでゆふよなことでないぞや
けふまではどんなはなしもだん、といろ、とひてきたるなれども
なにゆふもひがらくくげんきたらんでなにもみえたることはないので

日柄刻限は時節をいふ。

それゆへになにをつきひがゆふたとてみなうたがふてゆいけすばかり
つきひにはだい、ちこれがざんねんなんでもこれをしかとあらわす

いま、ではどんなことをばゆふたとてすぐにみえたることはなければ
このたびはみつかのうちにだん、とせかいのはなしなにをきくやら

急病とか急用とかは即時の願で御利益を戴くが普通の身上事情は大抵三日三夜の御
願するのである。

これからはち、つきひはたらくでどんなしごとをするやしれんで
このよふにやまいつきものばけものもかならずあるとさらにおもふな

世間では病とか憑物とか化物とか云つてゐるがこれは皆神の残念立腹である。

いま、でにつきひざんねんやま、とつもりてあるをみなはらすでな
このはらしどふしてはらすことならばつきひのころみなしてみせる
けふまではこのよはじめてひはたてどつきひしんじつまだしろまいな
どのよふなことでもつきひすることやいかなことでもやまいではない

みのうちにどのよなことをしたとてもやまいではないつきひていりや
せかいにはこれらとゆうてゐるけれどつきひざんねんしらすことなり
これらは虎列刺である。

せかいちうどのひとでもおなじこといづむばかりのころなれども
これからはころしいかりいれかへてよふきづくめのころなるよふ
つきひにはにんげんはじめかけたのはよふきゆさんがみたいゆへから
陽氣遊山は神の人間創造の第一の目的であり人間生活の第一義である。

せかいにはこのしんじつをしらんからみなどこまでもいづむばかりで
つきひよりよふきづくめとゆふのをなこれとめたならざんねん忍ろな
る

このはなしどふぞしいかりきゝわけてはやくしやんをしてくれるよふ

いまゞではつきひといふていたなれどもふけふからはなまいかへるで
けふまではたいしやたかやまはびかりてまゝにしてゐたとであれども
これからはおやがかわりてまゝにするこれそむいたらすぐにかやすで

代政政治が廢せられて眞に神の世界となるとの豫言である。

けふまでもおやのざねんとゆふものはちよとのことではないとおもへ
よ

このたびもまだせかいにはなにごともしはびかるばかりなにもしらすに
にんげんもこどもかわいであるふがなそれをおもふてしやんしてくれ
これは官憲に對する神の依頼である。

にちくにおやのしやんとゆふものはたすけるもよふばかりおもてる

それしらすみ。せかいぢういちれつになんどあしきのよふにおもふて

世間で天理教の目的や價値を誤解してゐることをいふ。

なにもかもおやのざんねんよくおもへこどもばかりにいけんしられて

官民共に神の子供である。其の子供の官憲より異見せらるゝからかく云ふのである。

これからはどんなところのいけんでもおやがでゝあるうけることなし
このいけんどのよなものがはびかりてゆふとおもへばすぐにしりぞく
どのよふなしごとするのまさきよりせへいつぱいにことわりておく
けふまではどんなことをもちしくにしんぱいしたることであれども
あすからはどんなことをばみたとてもなにをきいてもたのしみばかり
これまではたかやまからはなにもかもどんなさしづもうけたなれども

このさきはどのよなことをゆわれてもおやのさしづやさらにうけんで

これまでは官憲の指圖を受けただけこれからは神意を遂行するといふのである。

いまゝではひがらちいときたらんでごんなことでもじいとしてゐた
もうけふはひもぢうぶんにつんであるどんなことでもそのまゝにする
これからはおやのおもふことばかりひとことゆへばこれちがわんで

一本おやのおもひし。又一本おやのおもうる。

せかいぢういちれつはみなどこまでもどんなことをがやるよしれんで

ことをがは事が音韻の都合で延したのである。

どのよふなことがありてもしんじつのこゝろしだいにこわいことなし
こゝろさいすきやかすんだことならばどんなことでもたのしみばかり
このはなしうたごふこゝろあるならばしよちしてゐよどんなみちやら

せかいちうおやのたあにはみなこどもかわいあまりでなにをゆふやら
このせかいたかやまにてもたにぞこもおやのたあにはこどもばかりや
このたびはなんでもかでもしんじつのおやのころをしらしたいから
これさいがたしかにしよちしたならばいつまでゐてもよふきづくめや
このみちはおやがたのみやいちれつほどふぞしいかりしよちしてくれ
けふまではどのよなみちもだんくことふりぬけてはきたるなれども
これからのみちはなんでもめづらしいこのみちとふりぬけたことなら
それからはおやのころがいさみでゝどんなことでもはじめかけるで
これさいがはじめかけたることならばどんなものでもおやにもたれる
このみちをつけよふとてのしこしらへどんなものでもまだしろまいな

さあかゝれもふこれからのみちすじはどんなものでもあぶなきはない
いまゝではうちのものにもいろくにしんぱいかけてきたるなれども
あすからはおやがひとはなでるほどにどんなことでもかやししてやる
ひとはなでるとはひとはなさかすと同じ様の意味にて一働きするといふことであ
る。

さあけふはなにのはなしもだんくことまかしくゆへもふせへつふや
なにゝてもゆわずにいてはわからんでなにかいさいをみなゆてきかせ
このはなしなにのことやらしろまいなおやのはたらきみなゆておく
はたらきもなにのことやらしろまいなせかいのころみなあらわすで
これをばなあらわれたすとゆふのもなめへくくちでみなゆいかけ

る

天に口なし人をもつて云はしむ。即ち信徒の口を藉りて神意を宣傳するのである。

どのよふなことでもわがみくちいよりゆふことならばせひはあるまい

自分は云ふまいと思つても自分の口より出ることなら是非はあるまいといふことである。天理教徒の中此の經驗をもつてゐる人も亦少くはあるまい。

これからはめへくになにもゆわいでもおやがいらこみゆふてかゝる
で

このさきはどんなものでもしんじつにむねのそうじをみなしてかゝる
このそふじどふしてするとおもふかなどんないけんをするやしれんで
どのよふなことがありてもあんじなよなにかよるづはおやのいけんや
くちさきでなんぼしんじつゆふたとてきゝわけがないおやのざんねん

それゆへにおやがたいないりこんでどんなことをばするやしれんで

天理教徒の中では身上にかゝらなければ神意がわからないと云ふものがあるが其れは下愚の云ふことで神意が分らんから身上にかゝるのである。神意さへ分れば始めから身上にかゝる必要はない。

どのよふなせつないことがありてもなやまいではないおやのざんねんや
このはなしどこのことゝもゆわんでなおやのたあにはみなわがこやで
一本おやのため。

しんじつのおやのざんねんでたならばこのおさめかたたれもしろまい
これをばなまことしんじつあるならばどんなことでもゆふてきかする
どのよふなことをゆふやらしれんでなこれそむいたらすぐにしりぞく
これまではなにをしたとてとめられてそむくばかりのことであるから

けふのひはどのよなことをしたとてもなにをゆふてもそむきなきよふこのみちはくれぐれたのみおくほどにおやがひきうけあんじないぞやこのことはなにのことやおもふなよつとめなりものはやくほしいでもふけふはどんなことをばしたとてもなにもあんなおやのうけやいいまゝではかみにはなにもしらんからさしとめばかりいけんしたれどこのたびはどんなものでもかなわんでゆふこゝろならおやがしりぞく

これまでは官憲は神意を知らぬから止めに来たけれどももし知つてゐて止めに来るなら息が止まるといふことである。

このことをはやくこゝろにしいかりとさだめをつけてはやくかゝれよなにもかもはやくつとめのしこしらへおやのうけやいこわみないぞや

これをばなこゝろさだめてしやんしてはやくにんじゆのもよふいそぐ
で

はやぐとこゝろそろふてしいかりとつとめするならせかいおさまる

御筆先 十四號終

御筆先

十五號

明治十三年(教祖八十三歳の御時)正月より御書取

けふまではなにのこともどいくりごゆわすにいたることであれども
もふけふはなんでもかでもゆふほどにおやのざんねんこれおもてくれ
けふまではなにをゆふてもにんげんのころのよふにおもてゐたれど
さあいまはなにをいふてもにんげんのころあるとはさらにおもふな
どのよふなことをゆふやらしれんでなにをゆふてもしよちしてくれ
このたびはごんためしをするやらなこれでしいかりころさだめよ
このはなしたれがことゝもゆわんでなみなめへくのころさだめや

いかほどにせつないことがありてもなおやがふんばるしよちしてゐよ
これからはおやのゆふことしいかりとしよちしてくれあんどないぞや
あすからはおやがはたらきするほどにどんなものでもそむきでけまい
いまゝでもしぢうさんねんいせんからおやがあらわれはじめかけたで
けふまでもたいてぎねんもいくたびもぢいとじてゐたことであれども
さあけふはつきひのはらがはじけたでひかへてゐたことであれども
はじけるとは破裂すること。

いまゝではむらやとおもてじいくりとまだおさまりてゐたるなれども
このたびはごのよなこゝろあるものもみさだめつけてすぐにはたらく
こらほごにぎんねんつもりであるけれどこゝろしだいにみなたすける

で

いかほどにぎねんつもりであるとてもふんばりきりてはたらきをする
けふのひはなにをいふやらしれんでなおやのぎんねんみなあらわすで
いまゝではひとのこゝろのしんじつをしりたるものはさらになけれど
さあけふはどんなものでもしんじつのむねのうちをばたしかあらわす
これさいがみなあらわしたことならばむねのそふじがひとりでけるで
けふからはどんなはなしをしかけてもなにをゆふてもしよちしてくれ
だん／＼となにをゆうやらこれしれんどんなことでもおもわくをする
いまゝではしぢうさんねんいせんからあしをなやめたこれがしんばい

天保九年秀治氏が跛となつたことはいふ。

このたびはなんでもかでもこれをばなもとのとふりにしてかやすでな

其の後教祖様より屢々秀治氏の足を直してやると云つて跛直しのお勤め迄したが秀治氏は怒つて中止させた。

このはなしなにをつきひがゆふたとてどんなことでもそむきなきよふ
これからのおやのたのみはこればかりほかなることはなにもゆわんで

これ迄秀治氏は神の云ふことを素直に承けると云ふことがなかつた。故に此のお言葉がある。

このことをなにをたのむとおもふかなつとめいちじよのことばかりや
で

このつとめこれがこのよのはじまりやこれさいかのたことであるなら
さあけふはおやのゆふことなにごともそばのころにそむきなきよふ

そばなるのころちがゑはせひがないそでくど／＼ゆふておくぞや
けふのひはなによのこともせかいにはしりたるひとはさらになけれど
おやのめにしいかりみえてあるほどにどんなことやられたれもしろまい
このよふをはじめてからにいま／＼ではたれでもしらぬことばかりやで
そのことをおしへたいからだん／＼とそこでどのよなこともするのや
なにもかもどのよなこともゆておいてそれからおやがはたらきをする
はたらきもなにのこどやらしろまいなせかいちゆうはおやのからだや

天地は神の肉體である。

いま／＼でのおやのざんねんしらしたさそこでこのたびみなしてみせる
どのよふなことをするやらしれんでなみないちれつはしよちしてゐよ

このたびのざねんくどきのこのはなしみないちれつはなんとおもてる
このもとはしちうさんねんいせんからゑらいためしがかけてあるぞや
これさいがしいかりしよちしたならばどんなことをがかなわんでなし
せかいちうみないちれつをたすけたさそこでためしがゑらいことやで
けふまではどのよなみちもどふりぬけじいとしてゐたことであれども
もふけふはなんでもかでもしんじつをしてかゝるでなしよちしてゐよ
いまゝでとみちがころりとかわるでなみないちれつはこゝろさだめよ
世界は今一世の世界(舊世界)より二世の世界(新世界)へ向つて轉化しつゝある。天
理教は即ち此の世界の大轉化期の宗教である。

このみちはうちもせかいもへだてないせかいじゆうのむねのそふじや

このよふをはじめてからにけふまではほんしんちつをゆふたことなし
けふのひはほんしんちつをゆいかけるとふぞしいかりしよちしてくれ
このはなししちうさんねんいせんからゑらいためしがこれがいちじよ
このためしなにのことやおもふかなつとめいちじよせくもよふやで
このつとめごふいふことにおもふかななりものいれてにんずのもよふ
一本にんぢうのもよふ。

このつとめどんなものでもしやんせよこれとめたならわがみとまるで
教祖は警官が屢々止めに來るのについて彼の人達は皆な商賣だから止めに來るので
ある。も「本當に止める氣で來るなら息が止まるでと仰せになつた。

このよふをはじめかけたもおなじことないにんげんをはじめかけたで
これさいがはじめかけたることならばどんなたすけもみなうけやうで

このことはしいかりしよちせんならんこれぞめたならすぐにしりぞく
いまゝではたかやまやとてけんくさまゝにしてゐたことであれども
これからはいかほどたかいやまでもなたにぞこまゝにさらにでけまい

神の世界一列平等化の理想は此處に至つて益々徹底してゐる。

このさきはたにぞこにてはだんくとおふくよふきがみえてあるぞや
よふきは即ち用木にして神の使者道の道具をいふ。

だんくよふくにてはこのよふをはじめたおやがみないりこむで
このよふをはじめたおやがいりこめばどんなことをばするやしれんで
どのよふなことをしたとてあんなよなにかよろづはおやのうけやい
このことをはやくころにしいかりとさだめをつけておいてかゝれよ

けふまではどんなみちやらたれにてもしりたるものはさらになけれど
もふけふはしんのころをだんくよみなあらわすでしよちしてゐよ
おやのめにかのふたものはちくにだんくよころいさむばかりや
おやのめにざねんのはなんごきにゆめみたよふにちるやしれんで

人間萬事神の意志にあり。

このはなしどこのことゝもしれんでなせかいちゆうはみなわがこやで
いちれつにこどもかわいゝばかりなりごこにへだてはさらになけれど
しかときけころちがゑはせひがないそこでだんくよていれするのや
植木屋が植木に手入れするもおなじこと。

このことはたかやまにてもたにぞこもゆだんなきよにころさだめよ

さあたのむなをたのむとおもふかなはやくなりものよせてけいこふ
これまではどんなことでもじいくりとまだおさまりてゐたるなれども
もふけふはなんでもかでもはやぐとつとめせへねばならんことやで
いまゝではどんなことでもだんくといろくたのみかけてあれども
なにごとをたのんだとてもたれにてもきゝわけがないおやのざんねん
このたびのざねんくごきのこのはなしどうぞしいかりきゝわけてくれ
けふのひはおやがなにございふたとてどんなことでもそむきなきよふ
いまゝではそんなはなしをしたとてもなにをゆふてもにをいばかりや
けふのひのはなしといふはせへつふやもふそのまゝにすぐに見えるで
このはなししちうさんねんいせんからむねのざんねんいまはらすでな

それしらすうちなるものはなにもかもせかいなみなるよふにおもふて
このみちはしちうさんねんいせんからまことなんじゆなみちをとふり
た

天理教は決して一朝一夕に成り立つたものではない。其の間には波瀾屈折の徑路を
經て漸く此處に達したものである。其の波瀾屈折の徑路を皆な忘れてゐるが此の度
は其の目的と其の目的に達する徑路を確つかり自覺させるといふことである。

そのことをいまゝでたれもしらいでもこのたびこれをみなはらすでな
このはらしごふしてはらすことならばつとめいちじよでみなあらわす
で

このつとめおやがなにごとゆふたとてごんなことでもそむきなきよふ

天理教は絶対服従主義の宗教であると云つても其の絶対服従主義は人に對する絶対

服従主義にあらずして神に對する絶対服従主義である。此の一首は即ち神が人間に對する絶対服従の要求である。

こればかりくれぐれたのみおくほごにあとでこふかいなきよふにやでこのたびのつとめいちじよとめるならみよふだいなりとすぐとしりぞく

名代は即ち教祖のことをいふ。(一説には田村音次郎といふ説あり)

このはなしなんとおもふてそばなものもふひといきもまちてゐられんはやくとなりものなりとだしかけよつとめばかりをせへているから

御筆先 十五號終

御筆先 十六號

明治十四年(教祖八十四歳の御時)四月より御書取

いまゝではこのよはじめたにんげんのもとなることをたれもしろまいこのたびはこのもとなるをしいかりとごふぞせかいへみなをしへたいこのもとはかぐらりやふにんつとめはなこれがしんじつこのよはじまり

神樂兩人とは國床立尊と重足尊。

このたびのかぐらといふはにんげんをはじめかけたるおやであるぞやこのもとをしりたるものはないのでなこのしんじつをみなをしへるで

いまゞでもにちゞくどきだんゞとゆうてきかしたことはあれども
もふけふはいかほどつきひゆふたとていちれつこゝろわかりないので
それゆへにもふせへつふがきたるからせひなくいまはかやしするぞや
このかやしちよとのことゝはおもふなよあゝちこふちにおふくみえる
で

このよふのにんげんはじめもとなるをどこのひとでもまだしろまいな
このたびはこのしんじつをせかいちうごふぞしいかりみなをしへたい
しかときけこのもとなるといふのはなくにとこたちとおもたりさまや
このおかたごろみづなかをみすましてうをそみいとをそばへひきよせ
このたびのざねんといふはしんからやこれをはらするもよふないかよ

このことをかみがしいかりひきうけるごんなかやしもするとおもへよ
このかやしみえたるならばどこまでもむねのそふじがひとりだけで
いまゞではごのよなこともみゆるしてちいとしてゐたことであれども
けふのひはもふひがつんであるからなごんなことでもすぐにかやすで
このところとめるこゝろでくるならばそのまゝどこへつきひでるやら
でるのもなごんなことやらしろまいなつきひむかいにでるでしよちせ

神の云ふことを聞かぬ者は神がお迎ひ取りになるといふのである。

けふのひはもふちうぶんにつんであるごのよなみちがあるやしれんで
せかいちうみないちれつはしかとせよなんどきつきひつれてでるやら
けふのひはめづらしことをゆいかけるなにをゆふともたれもしろまい

せかいにはみなどこまでもおなじことごとくかたづけこしらへをする
いかほどにこしらへしたといふたとてそのさきなるはたれもしろまい

松枝子(秀治氏の夫人)音次郎(秀治氏の庶子)を簞笥二棹田地三反八畝金百圓を持參
せしめて丹波市の田甚隠居へ養子にやらうとした。教祖はこれを止めたが音次郎は
之れを聞かないで田甚隠居へ行つた。其れから一年経つか経たぬ中に零落して財産
を失つて了つた。

つきひにはどんなおもわくあるやらなこのみちすじはしりたものなし
このさきはごのよなゆめをみるやらなもんくかわりてこゝろいさむで
どのよふなめづらしゆめをみるやらなこれをあいづにつとめにかゝれ
けふのひはどのよなこともきいてゐるなんどきもんくかわることやら
ごのよふなごがありてもうらみなよみなめへ〜にすることやでな

つきひにはみないられつはわがこなりかわい〜つばいおもてゐれども
めへ〜にすることばかりせひはないそこでじいくりみてゐるのやで

幾ら親が何んと思つても子が聞かれば仕方がない。幾ら神が何んと思つても人が聞
かねば仕方がない。

けふのひはなにもしらずにいるけれどあすにちをみよゑらいおふかん
このみちがみゑたるならばどのよふなものでもかなふものはあるまい
つきひにはどんなおもわくあるやらなこのこゝろをばたれもしろまい
これをばなみえかけたならどこまでもむねのうちをばひとりすみきる
これからはこのよはじめてなにもかもないことばかりゆいかけるなり
いま〜ではひとのこゝろのしんじつをたれかしりたるものはなければど

このたびはかみがおもてへでゝるからどんなことでもみなをしへるで
このはなしどころのことゝもゆわんでなみのうちさわりこれでしらす
こんなことなんでゆふやおもふなよかわいあまりでゆふことやでな
どのよふなことでもわがみすることにかみのしらんといふことはない
何故なれば人間の肉體は神の肉體であるからである。

それゆへになにもよろづをことわりてそれゆへかゝるしごとなるぞや
いまいではなによのことともじいくりとひかへてゐたることであれども
しかときけいまゝでなるのはなしはななにをいふてもきいたばかりや
けふのひはみちがいそいでゐるからなどんなことでもはやくみえるで
それゆへにでかけてからはどむならんそこでいちれつしやんするよふ

いまゝでもかみのくどきはだん／＼といろ／＼といてきたるなれども
いかほどにくぎいたとてもたれにてもきゝわけがないおやのざんねん
これまでもよいなくどきやないほどにこのたびこそはしやんするよふ
このはなしなんとおもふてきいてゐるつもりかさなりゆへのことやで
けふのひはかみのざんねんいづくはよいなることでないとおもへよ
外の者に迫害せらるゝさへあるに内の者が第一神の云ふことを用ゐぬ。それで此の
お言葉がある。

つきひよりないにんげんやないせかいはじめかけたるおやであるぞや
そのところなにもしらざることもになたいことめられこのざねんみよ

此の年村民が集合して太鼓を止めた。

このたびはこのかやしをばするほどにみなどこまでもしよちしてゐよ
けふまではなにもしらずにゐたけれどさあみえかけたゑらいたのしみ
このみちはどんなことやとおもふかなせかいちれつむねのそふじや
このことはなにのことやとおもてゐるかみのざんねんはらすことやで
このさきはどこのひとともゆわんでなむねのうちをばみなみてゐるで
けふからはつきひでかけるはたらきにどんなことをばするやしれんで
いまからのつきひはたらきするのはなどこでするともたれもしろまい
たかやまもたにぞこまでもせかいぢういちれつをみなあちこふちと
つきひよりせかいぢうをばはたらけばこのおさめかたもれもしろまい
それゆへにこのしづめかたちよとしらすいちれつはやくしやんするよ

ふ

神慮を安めるにはお勤め(助け一條の勤め)をするにある。

つとめでもほかのことゝはおもふなよたすけたいのがいちじよばかり
で

それしらすみなたれにてもだん／＼となんぞあしきのよふにおもふて
にんげんはあざないものであるからなにをゆふともしんをしらずに
けふまではどんなことでもゆわなんだじいとしてゐたこのざねんみよ
これからはかみのおもわくするからはどんなことをばするやしれんで
いまゝではなにもゆふたりおもふたりまゝにしてゐたことであれども

今迄は好きなことを云ひ、好きな事をして來たけれども其れは親の留守中のことで

親が歸つて來れば子供の我儘にはさせぬといふことである。

このさきはかみがしはいをするからはどんなことでもまゝにでけんでにんげんのめへにはなにもみえねどもかみのめへにはみなみえてあるこしらへをやるのはしばしまちてくれどろみづなかへはめるごとくや
晋次郎を仕度して田菴隱居へやることを少し待つてくれと云ふことである。

いまゝではどんなことでもゆわなんだけふはなんでもゆわねばならん
今迄は秀治氏に對しても松枝子に對しても控えて何も云はない様にして來た。けれども今度は何んでも彼でも云はねばならんといふのである。

もふけふはなんでもかでもみえるでなくげんきたらつきひつれゆく
秀治氏の出直し(四月十日出直し)を云ふ。

けふのひはもうぢうぶんにつんできたなんどきつれにでるやしれんで

つれいくもちよとのことではないほどにおふくみえるがたれもしろま
い

連れ行くのも秀治氏一人ではない松枝子始め他の人も連れて行くとの神意。

いかほどのたかいところとゆふたとでもふけふからはもんくかわるで
さあしやんこれからこゝろいれかへてしやんさだめんことにいかんで

御筆先 十六號終

御筆先 十七號

明治十四年(教祖八十四歳の御時)六月より御書取

いまゞではなんのみちやらしれなんだけふからさきはみちがかわるで

此の年の四月秀治氏の出直しあり道の變り目たることを思ふべし。

このみちはどふゆふことにおもふかなかんろふだいのいちじよのこと
このだいをどふゆふことにおもてゐるこれはにほんのいちのたからや
これをばななんとおもふてみなものこのもとなるをたれもしろまい
このたびはこのもとなるをしんじつにどふぞせかいへみなおしへたい
このもとはいざなぎいゝといざなみとみのうちよりのほんまんなかや

そのとこでせかいちゆうのにんげんはみなそのぢばではじめかけたで
そのぢばはせかいちれつとこまでもこれはにほんのこきよふなるぞ
や

にんげんをはじめかけたるしやふこにかんろふだいをすゑておくぞや
このだいがみなそろひさいしたならばごんなことをがかなわんでなし

今日は未だ下の臺が二つ出来てゐる丈けであるが理想の世界が實現した曉には全部

出来るといふことである。

それまでにせかいちゆうをどこまでもむねのそふじをせねばならんで
このそふじごこにへだてはないほどにつきひみわけてゐるとおもへよ
つきひにはどんなところにあるものもころしだいにみなうけとるで

いまゝではごんなころでゐたるともいちやのまにもころいれかへ
しんじつにころすきやかかれかへばそれもつきひがすぐにうけとる
つきひにはせかいちゆうはみなわがこかわいつぱいこれがいちじよ
いまゝではどんなものでもむねのうちしりたるものはさらにあるまい
このたびはごんなところにあるものもむねのうちをばみなゆてきかす
これまではかべひとへでもへだてたらなにをゆふてもちよとにしるま
い
けふからはよこめふるまもないほどにゆめみたよふになにをするやら
いまゝでのつきひぎねんとゆふものはなかくちよとのことでないぞ
や

けふまではなにもしらずにいたけれどさあみえてきたるらいほんみち
このみちをはやくみたふてせきこんださあこれからはよふきづくめや
このはなしどふゆふことにおもふかなふでのさきからみえてきたなら
いまゞではどのよなこともきいていたこのたびこそはざねんはらすで
このはらしどふゆふことにおもふかななんどきどこでしりぞくやらな
これまでのながいどふちふこのざねんちよそのことではないとおもへ
よ

これからはこのかやしをばするほごにみないちれつはしよちしてゐよ
せかいぢうごこのものとはゆはんでなつきひしいかりみなみてゐるで
どのよふなことをゆふてもおもふてもつきひしらんとゆうことはない

このさきはどのよなことをするにもなつきひさきへとことわりておく
これからはつきひざんねんでたならばどのよなことがあるやしれんで
けふのひはどのよなこともつゝできたかみのざんねんはらすみてゐよ
いまゞではこのよはじめたにんげんのもとなるちばはたれもしらんで
このたびはこのしんじつをせかいちうへごふぞしいかりおしへたいか
ら

それゆへにかんろふだいはじめたはほんもとなるのところなるのや
こんなことはじめかけるとゆうのもなせかいちゆうをたすけたいから
それをばななにもしらざることもなとりはらわれたこのざんねんは

明治十五年春甘露臺の臺石を据ゑて五月丹波市署より取拂はれたことをいふ。

しかどきけこのさきなるはどのよふなかやしあるやらこれしれんでな
つきひよりこのざんねんとゆふのはななか／＼ちよとのことでないぞ
や
かやしでもちよとのことゝはおもふなよごんなことをばつきひするや
ら

このはなしなんとおもうぞみなものかみのざんねんゑらいことやで
いまゝではどのよなみちもだん／＼ととふりぬけてはきたるなれども
もちいとのかくげんきたらんそれゆへにちいとしていたことであれど
も

けふのひはもふぢふぶんにつんできたかくげんきたらすぐにかやすで
このひはないつのことやおもてゐるにじゆるくにちがきたることな
ら

二十六日は明治二十年正月廿六日教祖御昇天の日をさして云ふ。

それからはなんでもかでもしんじつのことゝろそれ／＼みなあらわすで
こんなことなんでいうやおもうなよかわいあまりでゆうことやでな
つきひにはせかいちゆうのこどもはなかわいばかりをおもてゐるから
それゆへにせかいちゆうをどこまでもむねのそふじをしたいゆへから
このそふじごふゆうことにおもてゐるたすけばかりをおもてゐるから
たすけでもあしきなをするまでやないめづらしたすけおもてゐるから
このたすけどふゆふことにおもふかなやますしなすによわりなきよに

以上七首の中に神の最後の目的が明々白々に表はされてある。

こんなこといま、でどこにないことやこのしよふこふをしらしたさや
で

これまではどなたづねでもないことやこのたびかみはじめたさやで
けふまではごんなみちやらしれなんだこれからさきはみちをしらす
このみちはどふゆふことにおもふかなつきひざんねんいちじよふのこ
と

このざねんなにのとこやおもふかならんふだいがいちのざんねん

甘露臺を取り拂はれたのが第一殘念であるといふのである。其れ迄の神の御意では

「悪しきを拂ふて助け急き込む。一列澄ます甘露臺」

即ち甘露臺を建て、から世界一列を救済する御心算であつたが此の事あつて以來

「悪しきを拂ふて助け急き込む。一列澄まして甘露臺」

即ち世界人心を濟まして無形の甘露臺を建て、から有形の甘露臺を建設することに
變更せられたのである。

このざねんちよとのことではないほどにどんなかやしをつきひするや
ら

どのよふなことがありてもうらみなよみなめへくにしておいたのや
このさきはせかいぢゆうはどこまでもたかやまにてもたにぞこまでも
これからはせかいぢれつだんくとむねのそふじをするとおもへよ
このそふじなんとおもふぞみなものかみのこゝろをたれもしろまい
つきひにはごんなざねんがあるとてもいま、でじいとみゆるしてゐた

さあけふはひもちゆぶんにつんできたなんでもかやしせずにおられん
このかやしなにのことやおもてゐるかみのざんねんばかりなるぞや
このざねんちよとのことはおもふなよつもりかさなりゆへのことや
で

つきひにはせかいぢゆうはみなわがこかわいゝつぱいおもてゐれども
それしらすみないちれつはめへゝにほこりばかりをしやんしてゐる
このこゝろかみのざんねんおもてくれどもむなんともゆふにゆはれん
いまゝでのよふなることはゆわんでなこれからさきはさとりばかりや
このさきはなにをゆふやらしれんでなどふぞしいかりしやんしてくれ
さとくたをとくびよさまく

このはなしあいすたてやいでたならば
なにゝついてもみなこのとふり
これをばないちれつこゝろしやんたのむで

さとくは教祖の御實家、たむとくは田村音次郎、びよさまくは秀治氏の夫人
松枝子の實家平等寺村の小東政吉、此の三軒は親戚の中で最も激しいお道の反對者
であつた。其れで合圖立て合ひ出たならば即ち悪い理が循環して來たならば此の道
に反對するものは何んでも此の通りになるといふことを確つかり自覺しなければな
らないといふのである。特に教祖と最も縁戚關係の深い三軒を擧げられたのは
神の道には親族はない。
と云ふことを特に明示せられたのである。

御筆先 十七號終

御筆先追歌

明治十八年(教祖八十八歳の御時)酉五月御書取

けふまではなんのみちでもしれなんだこれからさきはみちをしらす
このみちはかみのおもわくばかりやでなにをいふともちよとしれん
で
なにごとをゆふともこれをけさんよふこれとめたならいきがとまるで
これからはかみがしいかりいりこんでなにをいふともするともしれん
で
それでことわりゆふておきます

御筆先終

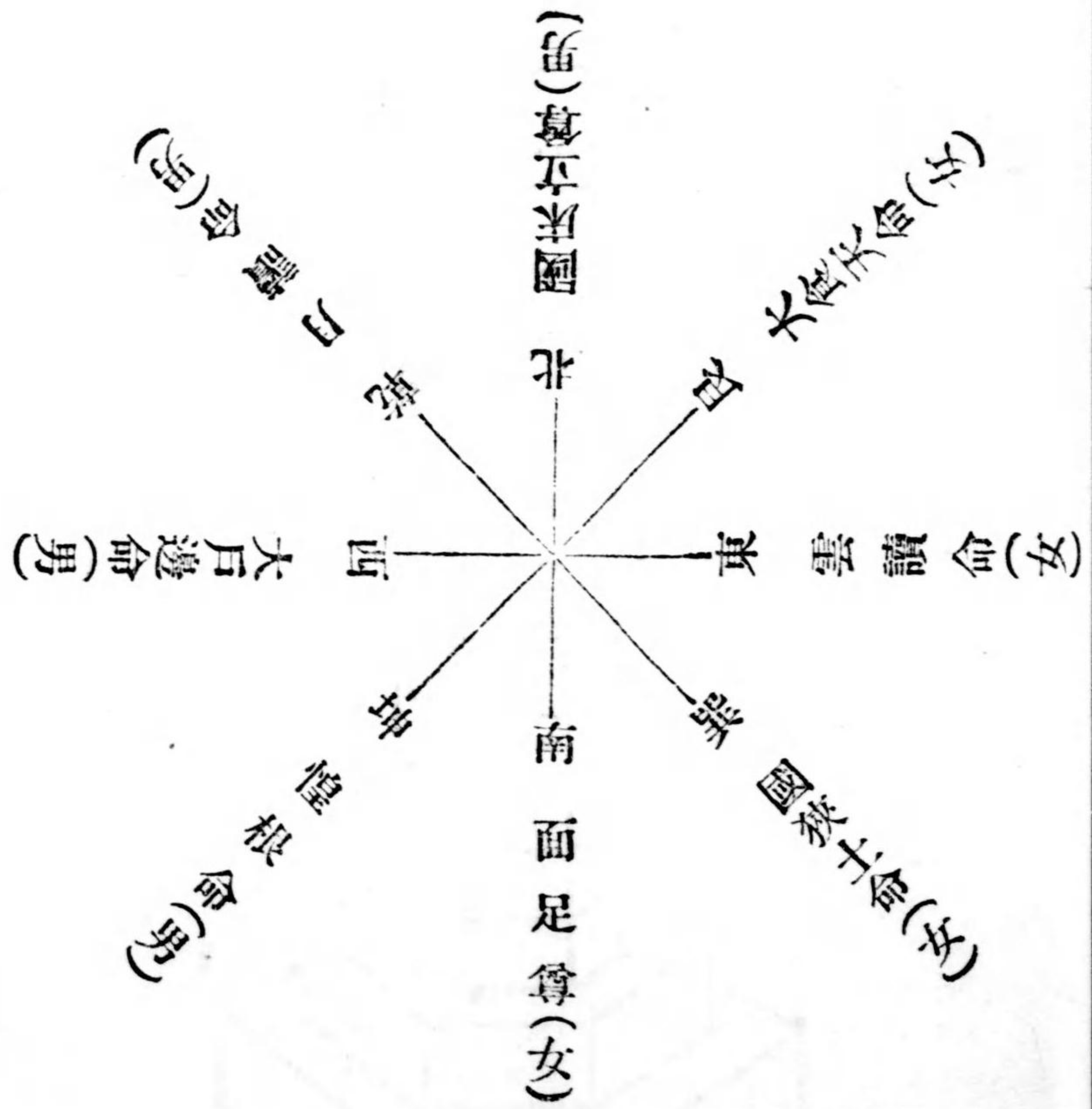
附 錄

甘露臺圖解

甘露臺三十下り

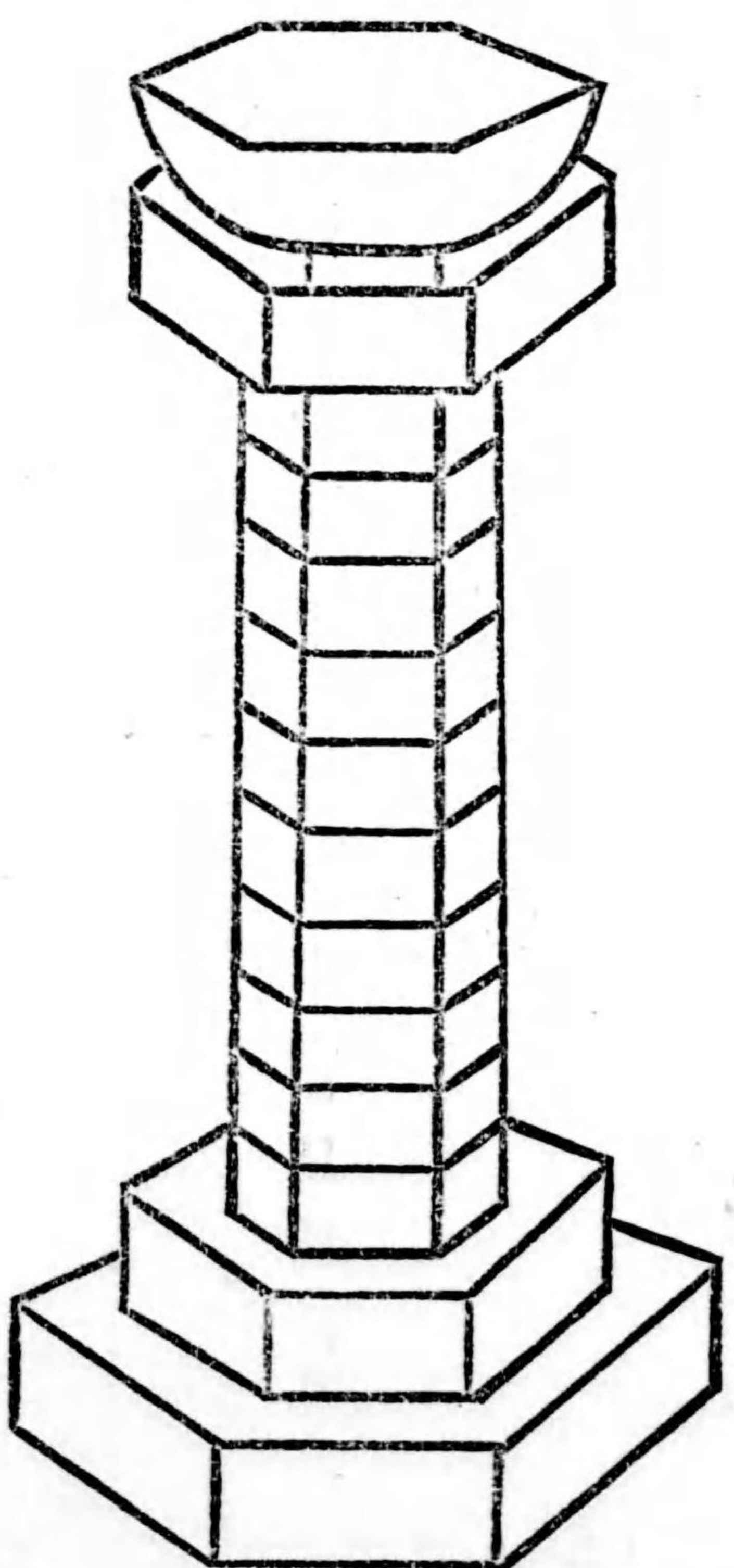
御神樂歌

(一) 甘露臺位置



中 央 甘 露 臺 { 伊 邪 那 岐 命 }
 { 伊 邪 那 美 命 }

(二) 甘露臺模型圖(説明本文参照)



甘露臺圖解

大平隆平

(一) 天理教の理想

天理教の終局の理想は其の聖典御神樂歌の冒頭に掲げたる朝夕の祈禱の文句の中に示されてある。其の祈禱の文句とは

悪しきを拂ふて助け急き込む

一列澄まして甘露臺

即ちこれである。

此の意味は世界の罪惡を凡て清めて此の地上に無上幸福の理想の世

界を實現せんとするのである。之れが天理教の第一義理想である。

第二義の理想は此の無形の甘露臺世界の建設と共に人間始め世界始めの根源地即ち大和國山邊郡庄屋敷村(現今の三島)天理教本部甘露臺地場に有形の甘露臺を建設することである。

(二) 甘露臺建設の由來

御筆先十七號

此の道は何う云ふ事と思ふかな甘露臺の一條の事

此の臺を何う云ふ事に思ふてゐるこれは日本の一の寶や

これをばな何んと思ふて皆のもの此の元なるを誰も知るまい

此の度は此の元なるを眞實に何うせ世界へ皆教しへたい

此の元は伊邪那岐と伊邪那美と身の内(人間)なるの本眞中や

其の所で世界中の人間は皆其の地場で始めかけたで

其の地場で世界一列何處迄も掘れば日本の故郷なるぞや

人間を始め掛けたる證據に甘露臺を据ゐて置くぞや

此の臺が皆揃ひさへしたならば何んな事をか叶はんでなし

即ち天理教本部甘露臺地場に有形の甘露臺を建設するのは此の處にて伊邪那岐伊邪那美の二尊が人間始めをした紀念碑として建てるのである。

(三) 甘露臺の形状と意義

御筆先九號

これからは何の話をするならば甘露臺の話一條

今なるの甘露臺と云ふのはな一寸の雛型迄のことやで

これからはだん／＼確かと云て聞かす甘露臺のもよふばかりを

此の臺を少し掘り込み差し渡し三尺にして六角にせよ

今迄にいろ／＼話説いたるは此の臺据ゐるもよふばかりで

これさへが確いかり据ゐて置いたなら何も恐みも危きもない

月日より指圖ばかりでした事をこれ止めたなら我が身止まるで

これを見て眞事眞實結構とこれぞ月日の教へなるかよ

此の臺がでけたち次第勤めする何んなことでも叶はんでなし

此の臺も何時何うせへと云はんでなでけたちたなら勤めするぞや

これさへが勤めにかゝりでたならば何叶はんと云ふてないぞや

これを見よ確しかに月日食物の與へ確いかり確しか渡する

何のよふな事でも確しか眞實の證據なければあやうき事

これからは何のよな事もだん／＼とこまかしく説くこれ背くなよ

此の話何を云ふやと思ふなよ甘露臺のもよふ一條

此の臺もだん／＼と積み上げて又た其の上は二尺四寸に

其の上に平鉢のせて置いたなら其れより確しか食物をやる

食物を誰に與へる事ならば此の世始めた親に渡する

天よりに與へを貰ふ其の親の心を誰か知りたものなし

月日より確かに心見定めてそれより渡す食物の事

月日には之れを渡して置いたならば後は親より心次第に

甘露臺の形狀は一番下の臺が差渡し三尺に厚さが八寸にして六角形である。差渡し三尺と云ふのは元々神が人間を始める最初三日三夜に宿し込みたる理である。又た水火風の理である。水火風の理と云ふは火と水とが一の神。火水風の外に神はないと云つてゐる如く此の三素は一切の萬物の根元であるからである。厚さの八寸は八社八方の神の揃ふた理。八社八方の神とは國床立命(北)重足命(南)月讀命(乾)國狹

土命(巽)大戸邊命(西)雲讀命(東)惶根命(坤)大食天命(艮)の八柱の神である。又た最う一つの理は八方に擴がると云ふ意味である。六角と云ふのは無い人間無い世界を始める時の六臺の理を象徴したものである。六臺の神と云ふのは國床立命と重足命。此の二柱の神は月日である。月讀命と國狹土命。此の二柱の神は男女の生殖器である。伊邪那岐命と伊邪那美命。此の二柱の神は人間の種苗代である。以上六柱の神は人間宿し込みの元の神である。

次に第二番目の臺は差渡し二尺四寸に厚さが八寸形は第一の臺と同じく六角である。此の二尺四寸と云ふは人間が四寸に生長した時伊邪那岐伊邪那美の神が

「これならば五尺の人間になる」

と云つてニツコリ笑ふてお崩れになつた理即ちニツコリの二と四寸の四をとつて二尺四寸とするのである。何故ニツコリの二が二尺になるかと云へば子が四寸である。親は其れより一位上であるから二尺となるのである。今日人間が二寸に四寸の穴より生れて二尺に四尺の穴に歸つて行くのは其の理を象つたものである。焼場の瓶の二尺に四尺も同じ理。厚みの八寸と形の六角は下の臺と同一の理である。

此の上に積み上ぐる石の差渡しは一尺二寸。厚さが六寸にして六角である。此の一尺二寸と云ふのは重足命の頭の數(十二頭)に象つたのである。六寸六角は下の臺と同じ理である。此の積み上げたる石の數を載せるのである。

此の甘露臺の中に三寸の差渡しに五分角の穴がある。三寸とは神が人間を造り始めの時に三日三夜の間に住し込んだ理である。

以上の甘露臺の石を十三積み上げる時は總計八尺二寸となる。其中十三は十分身(三)に附く理。八尺は八方へ擴がる理。二寸はタツブリといふ理である。又た五分の穴は人間五分から成人した理。

今日は未だ下の臺が二つ出来て居る丈けであるが將來此の臺が全部出来上つた曉に此の臺に向つて神樂勤めをしてお願いを掛ければ天よ

り平鉢の中へ甘露を下さる。これが即ち食物である。

食物を誰に與へる事ならば此の世始めた親に渡す

月日には之れを渡して置いたならば後は親より心次第に

此の食物即ち甘露を頂けば人間は不老不死に達するのである。けれ

ども

それ迄に世界中を何處までも胸の掃除をせねばならんで

此の掃除何う云ふ事に思て居る助け計りを思て居るから

助けでも悪しき直る迄やない珍らし助け思で居るから

此の助け何う云ふ事に思ふかな病ます死なずに弱りなき様

こんな事今迄何處にない事や此の證據を知らしたさやで

神の大慈大悲は此處にある。

今日の人間は天理王命と云へば狐か狸の様に思ひ天理教と云へば淫
祠邪教の様に思つてゐるけれども將來元なる神の大慈大悲を知つたな
らば必らずや懺悔と後悔との爲めに身の置き所がないであらう。従つ
て信者未信者を問はず此の點をよく沈思黙考して一日も早く甘露
臺の建設に向つて努力しなければならぬ。

甘露臺圖解終

甘露臺三十下り

これは甘露臺地場定め(明治八年)以後の教祖の作である。

一

- 一ツ、ひのもとやまとにてやまべごほりのしよやしきに
- 二ツ、ふしぎこのたびうまれこにあたへあるのがめづらしい
- 三ツ、みつかめへよりかんろふがてんよりをりたごゆふわいな
小寒子嬢が玉姫となつて生るゝや三日目に天より甘露を下して育てるとの豫言。
- 四ツ、よにくだりたるかんろふがじみよふぐすりであるわいな
- 五ツ、いつもくすりはあるかいなこれはさきなるためしやで

六ツ、むねのわかりをせふこふにてんのあたへがあるのやで
七ツ、なにかてんりがかのふたらめづらしたすけあるものや
八ツ、やしきのうちへはいるならいかなものでもこいしなる
九ツ、このたびまではしらなんだもとなるぢばやおやさとや
十ドこのたびいちれつにむねにたづねてくるわいな

二

一ツ、ひろくもんよりさしかけてほんやのもよふしよふかいな
二ツ、ふしんするならぢごりからみさだめつけにやいかんでな
三ツ、みればよふばがじやまになるどこへなほしてよからうぞ
四ツ、よふばひとつでいかんでなみいつゆうつはせにやならん

五ツ、いつまでしやんしてみてもいづれよふばがじやまになる
六ツ、むりにとれゑとゆはんでなこゝろさだめてとるがよい
七ツ、なんでもたちものとりはらいあとへたてるがよいほどに
八ツ、やしきないとはおもふなよもとのやしきがあるほどに
九ツ、このうちにいつまでもおいてもらふとおもへども
十ドこのたびせひがないやかたもらふてたちかへる

三

一ツ、ひろくのにたきばしよふをはやくぢどりをするがよい
二ツ、ふしぎなふしんであるからにうちのまゝにはならんでな
三ツ、みないちれつはかみがしはいをするほどに

四ツ、よりくるひとがあれこれとはながけするであらふから
五ツ、いつもだん／＼くるとてもたいぎするのやないほどに
六ツ、むりにどなたにもたのみかけるやないほどに
七ツ、なんでもしんじつかみさまのまじわりさしてもらいたい
八ツ、やがてふしんにかゝれどもたのみもかけずとめもせず
九ツ、こゝまでだん／＼ひはたてどじつにわかりたものはない
十ドこのたびしんじつにたしかりやくがみえました

甘露臺三十下り終

御神樂歌

あしきをはらうてたすけたまへてんりわつのみこと

ちよとはなしかみのいふこときいてくれあしきのことはいはんでな
このよのぢいとてんそをかたどりてふうふをこしらへきたるでなこれ
はこのよのはじめだし

なむてんりわうのみことよふし／＼

あしきをはらうてたすけせきこむいちれつすましてかんろだい
よろづよのせかい／＼ちれつみはらせど　むねのわかりたものはない
そのはづやといてきかしたとはない　しらぬがむりではないわいな

このたびはかみがおもてへあらはれて なにかいさいをときよかす
このところやまとのぢばのかみがたと いうておれどももとしらぬ
このもとをくはしくきいたことならば いかなものでもこいしなる
きよたくばたづねくるならいうてきかす よろづいさいのもとなる
を
かみがでなにかいさいをとくならば せかいちれついきむなり
いちれつにはやくたすけをいそぐから せかいのころもいさめか
け
なむてんりわうのみことよふしく

一下り目

- 一ツ正月こゑのさづけは やれめづらしい
- 二ニにつこりさづけもろたら やれたのもしや
- 三ニさんざいころをさだめ
- 四ツよのなか
- 五ツりをふく
- 六ツむしやうにでけまわす
- 七ツなにかにつくりとるなら
- 八ツやまとはほうねんや
- 九ツこゝまでついてこい
- 十ドとりめがさだまりた

なむてんりわうのみこと

二下り目

とんくんとんと正月をどりはじめはやれおもしろい

二ツふしぎなふしんかゝれば やれにぎはしや

三ツみにつく

四ツよなほり

五ツいづれもつきくるならば

六ツむほんのねえをまらふ

七ツなんじふをすくひあげれば

八ツやまひのねをきらふ

九ツこゝろをさだめぬやうなら

十デところのをさまりや

なむてんりわうのみことく

三下り目

一ツひのもとしよやしきの つとめのばしよはよのもとや

二ツふしぎなつとめばしよは たれにたのみはかけねども

三ツみなせかいがよりあうて でけたちきたるがこれふしぎ

四ツようくこゝまでついてきた じつなたすけはこれからや

五ツいつもわらはれそしられて めづらしたすけをするほどに

六ツむりなねがひはしてくれな ひとすぢごゝろになりてこい

七ツなんでもこれからひとすぢに かみにもたれてゆきまする
八ツやむほどつらいことはない わしもこれからひのきしん
九ツこゝまでしんじんしたけれど もとのかみとはしらなんだ
十ドこのたびあらはれた じつのかみにはさうゐない
なむてんりわうのみことく

四下り目

一ツひとがなにごといはうとも かみがみてゐるきをしすめ
二ツふたりのこゝろををさめいよ なにかのことをもあらはれる
三ツみなみてゐよそばなもの かみのすることなすことを
四ツよるひるどんちやんつとめする そばもやかましようたてかろ

五ツいつもたすけがせくからに はやくようきになりてこい
六ツむらかたはやくにたすけたい なれどこゝろがわからいで
七ツなにかよろづのたすけあい むねのうちよりしあんせよ
八ツやまひのすつきりねはぬける こゝろはだんくゝいさみくる
九ツこゝはこのよのごくらくや わしもはやんゝまゐりたい
十ドこのたびむねのうち すみきりましたがありますがたい
なむてんりわうのみことく

五下り目

一ツひろいせかいのうちなれば たすけるところがまゝあらう
二ツふしぎなたすけはこのところ おびやはうそのゆるしだす

三ツみづとかみとはおなじこと　こゝろのよごれをあらひきる
四ツよくのないうものなけれども　かみのまへにはよくはない
五ツいつまでしんじんとしたとても　やうきづくめであるほどに
六ツむごいこゝろをうちわすれ　やさしきこゝろになりてこい
七ツなんでもなんぎはさゝぬぞへ　たすけいちじよのこのところ
八ツやまとばかりやないほどに　くにぐまでへもたすけゆく
九ツこゝはこのよのものちば　めづらしところがあらはれた
どうでもしんぐするならば　かうをむすばやないかいな
なむてんりわうのみことく

六下り目

一ツひとのこゝろといふものは　うたがひぶかいものなるぞ
二ツふしぎなたすけをするからに　いかなることもみさだめる
三ツみなせかいのむねのうち　かゝみのごとくにうつるなり
四ツようこそつとめについできた　これがたすけのもとだてや
五ツいつもかぐらやてをどりや　す忍ではめづらしたすけする
六ツむしやうやたらにねがひでる　うけとるすぢもせんすぢや
七ツなんぼしんぐしたとても　こゝろえちがひはならんぞへ
八ツやつぱりしんぐせにやならん　こゝろえちがひはでなほしや
九ツこゝまでしんぐしてからは　ひとつのかうをみにやならぬ
十ドこのたびみえました　あふぎのうかゝひこれふしぎ

なむてんりわうのみことく

七下り目

一ツひとことはなしはひのきしん にはひばかりをかけておく
二ツふかいころがあるなれば たれもとめるでないほどに
三ツみなせかいのころには でんちのいらぬものはない
四ツよきちがあらば一れつに たれもほしいであらうがな
五ツいづれのかたもおなじこと わしもあのちをもとめたい
六ツむりにどうせといはんでな そこはめいくのむねしだい
七ツなんでもでんちがほしいから あたへはなにほどいとても
八ツやしきはかみのでんちやで まいたるたねはみなはへる

九ツこゝはこのよのでんちなら わしもしつかりたねをまここ
十ドこのたびいちれつに ようこそたねをまきにきた
たねをまいたるそのかたは こえをおかすにつくりとり
なむてんりわうのみことく

八下り目

一ツひろいせかいやくになかに いしもたちきもないかいな
二ツふしぎなふしんをするなれど たれにたのみはかけんでな
三ツみなだんくとせかいから よりきたことならでけてくる
四ツよくのころをうちわすれ とくところをさだめかけ
五ツいつまでみあはせむたるとも うちからするのやないほどに

六ツむしやうやたらにせきこむな　むねのうちよりしあんせよ
七ツなにかこゝろがすんだなら　はやくふしんにとりかゝれ
八ツやまのなかへといりこんで　いしもたちきもみておいた
九ツこのききらうかあのいしと　おもへどかみのむねしだい
十ドこのたびいちれつに　すみきりましたがむねのうち
なむてんりわうのみことく

九下り目

一ツひろいせかいをうちまわり　一せん二せんでたすけゆく
二ツふじゆうなきやうにしてやらう　かみのこゝろにもたれつけ
三ツみればせかいのこゝろには　よくがまじりてあるほどに

四ツよくがあるならやめてくれ　かみのうけとりでけんから
五ツいづれのかたもおなじこと　しあんさだめてついてこい
六ツむりにでやうといふでない　こゝろさだめのつくまでは
七ツなか／＼このたびいちれつに　しつかりしあんをせにやならん
八ツやまのなかでもあちこちと　てんりわうのつとめする
九ツこゝでつとめをしてゐれど　むねのわかりたものはない
とてもかみなをよびだせば　はやくこもとへたづねでよ
なむてんりわうのみことく

十下り目

一ツひとのこゝろとゆうものは　ちよとにわからんものなりし

二ツふしぎなたすけをしてゐれど あらはれでるのがいまはじめ
三ツみづのなかなるこのどろう はやくいだしてもらひたい
四ツよくにきりないどろみづや こゝろすみきれごくらくや
五ツいつくまでへもこのことは はなしのたねへとなるほどに
六ツむごいことばをだしたるも はやくたすけをいそぐから
七ツなんぎするものこゝろから わがみうらみであるほどに
八ツやまひはつらいものなれど もとをしりたるものはない
九ツこのたびまでへはいちれつに やまいのもとふはしれなんだ
十ドこのたびあらわれた やまひのもとふはこゝろから
なむてんりわうのみことく

十一下り目

一ツひのもとしよやしきの かみのやかたのちばさだめ
二ツふうふそろうてひのきしん これがだいゝちものだねや
三ツみればせかいがだんくくと もつこになうてひのきしん
四ツよくをわすれてひのきしん これがだいゝちこえとなる
五ツいつくまでへもつちもちを まだあるならばわしもいこ
六ツむりにとめるやないほどニ こゝろあるならたれなりと
七ツなにかめづらしつちもちや これがきしんとなるならば
八ツやしきのつちをほりとりて ところかへるばかりやで
九ツこのたびまではいちれつに むねがわからんざんねんな

十ドことしはこえおかす じふぶんものをつくりとり
やれたのもしやありがたや

なむてんりわうのみことく

十二下り目

一ツいちにだいくのうかひに なにかのこともまかせおく
二ツふしぎなふしんをするならば うかひたてゝいひつけよ
三ツみなせかいからだんくと きたるだいくにほひかけ
四ツよきとურიやうがあるならば はやくこもとへよせておけ
五ツいづれとურიやうがよにんいる はやくうかひたてゝみよ
六ツむりにこいとはいはんでな いづれだんくつきくるで

七ツなにかめづらしこのふしん しかけたことならきりはない
八ツやまのなかへとゆくならば あらきとურიやうつれてゆけ
九ツこれはこざいくとურიやうや たてまへとურიやうこれかんな
十ドこのたびいちれつに だいくのにんじうもそろひきた
なむてんりわうのみことく

附記 今日用ゐられてゐる御神樂歌は前管長によつて餘程手入れせられた様である。従つて假名使ひ等も教祖の其れと一致してゐるか何うか譯らぬ。現に此の十二下り目の終りの行の「だいくのにんじうもそろひきた」の如き教祖の原本には「だいくのにんじうもそろひきた」と書かれたものである。其れを勝手に「にん」と改

めたのである。御神樂歌全體の中に未だ此の様な所があると思はれるけれども手元に教祖の眞筆がある譯でないから譯らぬ。残念ながら仕方がない。

其れから各下り目の終りに今日では「てんりわうのみことく」と二遍唱へるが元は「なむてんりわうのみことく」と云ひ、ちよとはなしとよろづよの後は更らによふし／＼をつけたものである。此の二つは共にこの出来ない重要な意味を有して居るのである。其れを勝手にとると云ふのは甚だ心得ぬことである。私はこれを附するを以て正當と信じて附けて置いた。

御神樂歌終

大正五年一月十日印 刷
大正五年一月十五日發 行
大正五年三月十一日再版發行

(定價五十錢)

著者兼
發行者

大平隆平

東京府下高田村雜司ヶ谷龜原七番地

印刷者

瀨下三郎

東京市神田區佐柄木町二十一番地

印刷所

文進堂

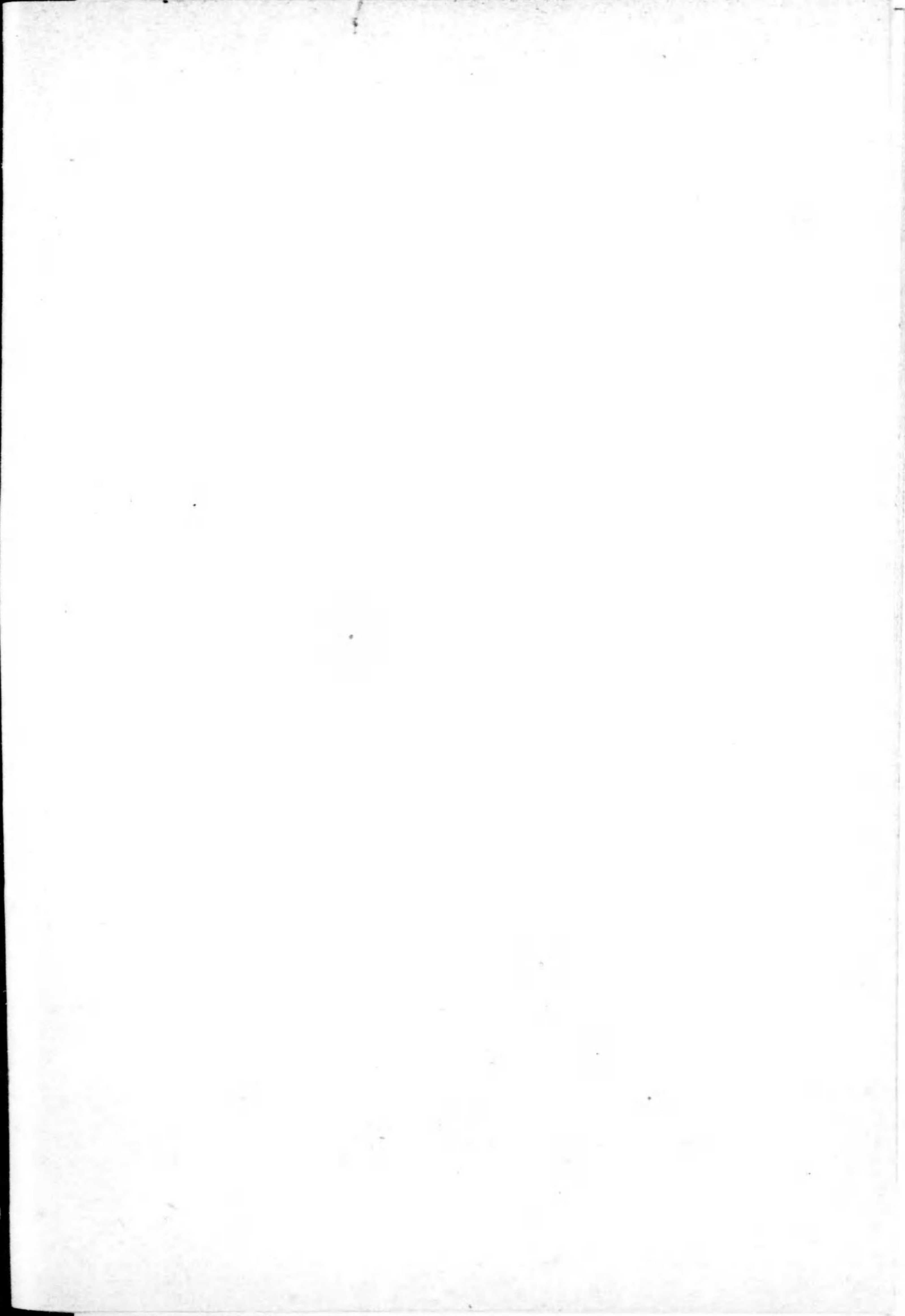
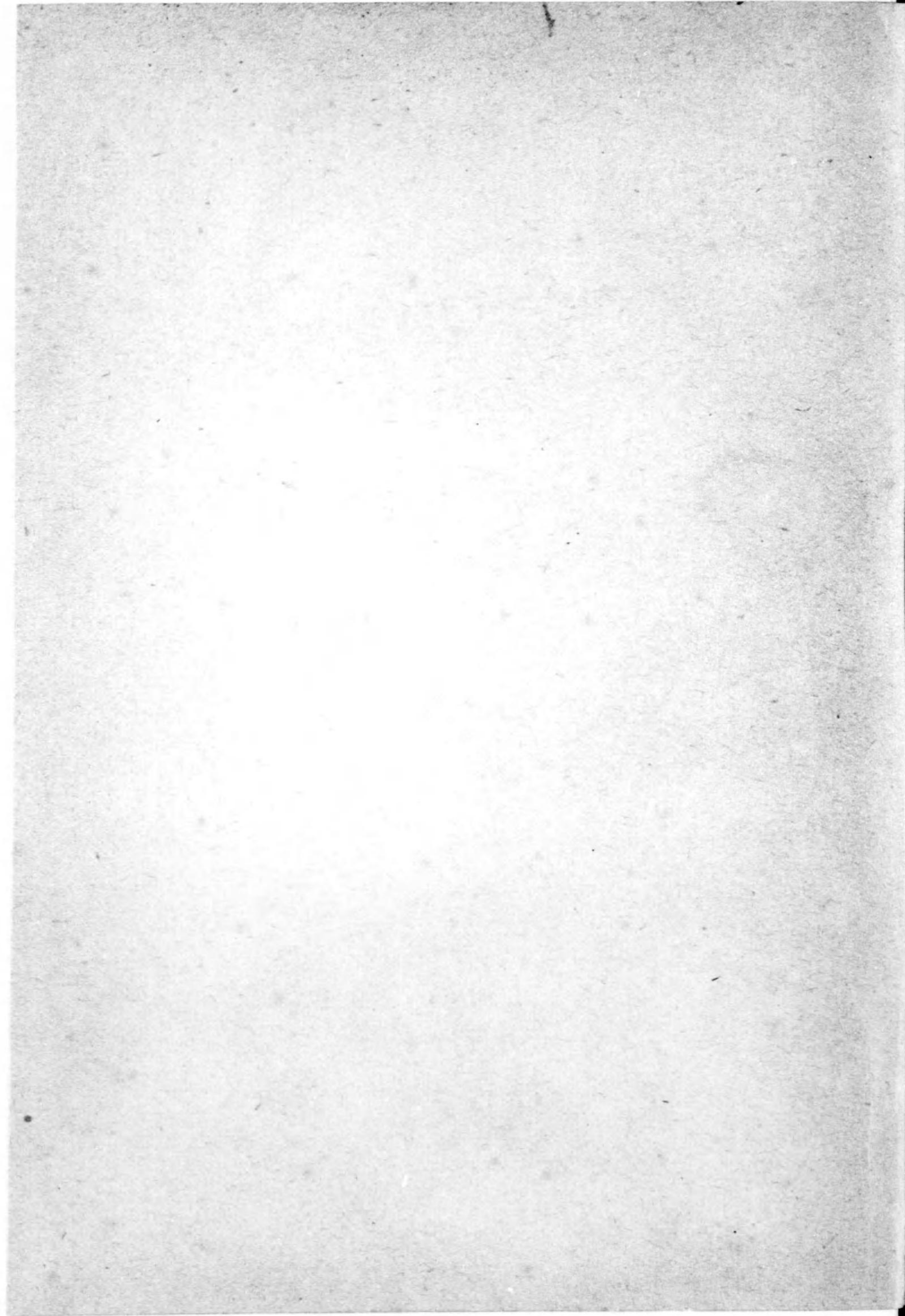
東京市神田區佐柄木町二十一番地

不許
複製

發行所

新宗敎社

東京府下高田村雜司ヶ谷龜原七番地



262
89

終

